

## 宮沢賢治の作品にみられる植物と植物園

— 総合的学習を目的とした大学植物園の活用について —

三 浦 修\*・米 地 文 夫\*\*

(1999年11月1日受理)

### 1 はじめに

いわゆる新学力観のもと、体験学習の必要性や教科の枠を越えた総合的学習が提起された。しかし、教師自身に体験学習や総合的学習の経験がほとんどない現状で、教育の現場では多くのとまどいがみられる。最近では、環境教育、情報教育、国際理解教育、福祉教育などを主要テーマとする総合的学習といった枠組みが提起されつつある。このような流れの中で、教員養成系大学では、体験学習や総合的学習に対応した学生の指導を、どのように具体化すべきであろうか。この課題に応えるものとして、大学キャンパス内のきわめて身近な体験学習の場である植物園やその類似施設を、実習や演習に、より積極的に活用することを提案したい。

体験学習は、室内における学習に対しての野外学習として位置づけることもできる。野外学習は野外研究に裏付けられる必要があり、野外研究には野外調査の能力が不可欠である。体験学習の経験のない教師がいる背景には、野外調査の実践やその能力をもつ人材を、大学において積極的に育成してこなかったことがあろう。

多くの大学には、このような野外学習や野外研究を主目的とした植物園、演習林、農場、臨海実験所などの教育・研究施設があるが(設楽, 1988)、これらの施設を利用する学習が、教員養成系大学のカリキュラムに組み込まれていないか、あるいは組み込まれていても利用頻度が高いとはいえない。

岩手大学キャンパスに設置されている教育学部の自然観察園と農学部の植物園は、理科や生活科のみならず、社会科学をはじめ多くの教科に関わった学習やその研究のフィールドとして、より一層利用されるべきであると考えられる。自然観察園に関する須田ほか(1998, 1999)の研究が、そのような実践を指向したものであることは、副題の「教材化のための基礎資料」から窺うことができる。この研究の目的は、大学におけるこの種施設の多角的、総合的な利用を前提にし、体験学習や総合的学習の指導における今後の新たな施設活用法を探ることである。

一方、宮沢賢治(以下、賢治と記す)の作品はこのような体験学習や総合的学習の対象として、教材化することができる特質をもっている。賢治の童話「やまなし」を教材とし、岩手大学教育学部の国語科と音楽科で1997年に行った合同演習の実践結果を上谷・中地(1998)が報

\* 岩手大学教育学部

\*\* 岩手県立大学総合政策学部

告した。その研究の目的は、教員養成系大学の教官同士の学際的研究と学校教育における総合的・横断的学習の構想であった。賢治の作品は、単に国語科の教材にとどまらず、理科、社会科学、音楽科などと広く関わる教材とすることができそうである。

伊藤（1998）は、「植物学で読む賢治の詩と童話」という副題を付した『宮沢賢治と植物』の中で、「賢治は植物や、植物学の知識を駆使して詩を書いたことになる。確かに賢治の詩には植物の専門用語や植物の学名がふんだんに使われている」と記した。宮城・高村（1980）の『宮沢賢治と植物の世界』の序文は、「賢治の生涯は、まさに、自然とともに、植物とともに息づいたものだったといっても過言ではないでしょう。そして、それだからこそ、「賢治童話」に、いつでも、樹や花や草が、うつくしく、しかも生命にみちあふれたすがたで登場しているのだ」である。そして、賢治の作品に登場した植物リストを作成した桜田（1996, 1998）によると、植物数はおおよそ 400 種にもなるという。

これらの著者は植物学の教師や研究者であるが、植物学は専門外である賢治の研究者も、作品中の植物を通して作品論や評論を書いている。例えば、化学出身の板谷（1979）は、『賢治博物誌』に「賢治植物園」とタイトルを付した章で、20 数種の植物を取り挙げ、それぞれ登場する作品の寸評を書いている。松田・笹川（1991）は、賢治の作品と植物について、作品舞台のすみずみに植物がちりばめられており、賢治を花の詩人と呼び、日本文学の中で、賢治のように数多くの植物を生き生きと描出した作家はいないと賞賛した。

このように植物は、賢治の創作活動を支えた、いわばキーマテリアルの一つである。したがって、植物を通して賢治の作品にアプローチすることは、賢治文学を研究する学生や研究者にとって重要な視点になろう。また、賢治作品と植物の関係を解明することは、「自然とともに生きた」や「花の詩人」と賞された賢治の自然観や自然環境との関わり方を知ることにつながる。さらに、ナチュラルヒストリー研究の面では、賢治の時代における岩手県の自然環境の復元への展開が期待される。

## 2 岩手大学教育学部自然観察園と農学部附属植物園

賢治の植物への関心は、中学時代、1910 年の岩手山登山（「植物採集岩手山登山隊」と多くの著書にみえる）が契機だといわれている（宮城・高村，1980）。本格的に植物学を学んだのは、1912 年以降の、盛岡高等農林学校（現岩手大学農学部）時代からである。

盛岡高等農林学校での賢治と植物の関わり場の一つが植物園である。日本で最も古い歴史をもつ大学レベルの高等教育機関附属の植物園は、1877 年設立の東京大学植物園（現理学部附属植物園）と 1886 年設立の札幌農学校植物園（現北海道大学農学部附属植物園）である（日本植物園協会，1990）。盛岡高等農林学校における植物園の設置と移転経過を調べた須田ほか（1998）によると、植物園は、学校創設（1902 年）間もない 1905 年に、現在の植物園東部の一角（図 1、林木園の東の部分）に開設されたようである。6 年後の 1911 年には、現在の教育学部自然観察園一帯（図 1、図 2 参照）に移設され、植物園として本格的な整備が進められたらしい。当時この他の大学など高等教育機関には類似施設がなかったはずで、盛岡高等農林学校植物園がわが国で 3 番目の大学植物園であると推定される。開園時から植物園が、現在のように一般市民に公開されていたかどうかは不明である。ちなみに、東京大学理学部附属植物園と北海道大学農学部附属植物園は開園時から公開され、社会に開かれた大学博物館の役割を当時か

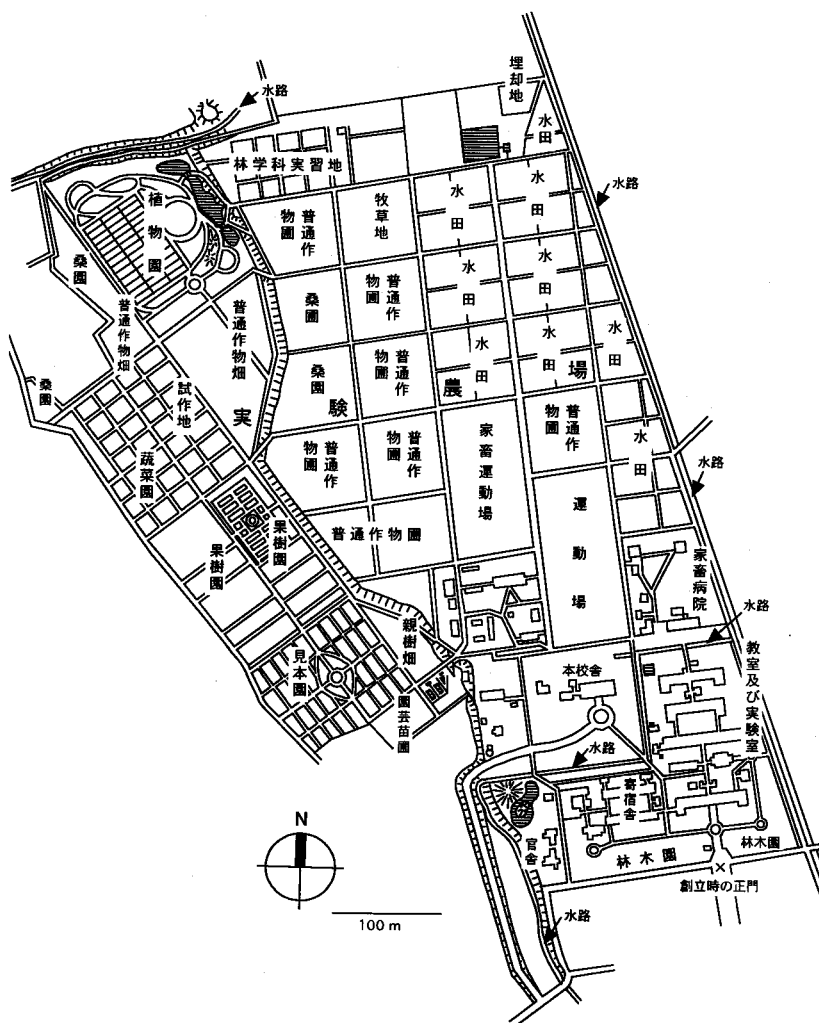


図1 盛岡高等農林学校構内（1913年当時）（須田ほか，1998）

ら果たしていた。

1913年の盛岡高等農林学校略図（盛岡高等農林学校創立記念祝賀会，1913）にはキャンパス北西部に植物園が、第1教舎（図1，教室及び実験室区画で東西に長い建物群を南から北へ、第1教舎，第2教舎，第3教舎，第4教舎）と寄宿舍の南側に林木園が明示されており，ほぼ賢治入学時（1915年）の植物園等諸施設のロケーションが復元できる。

1949年，学制改革により岩手大学が発足した。大学の整備拡充にともない，1974年に，盛岡高等農林学校創立以来，林木園であった区域を主体に，新たに農学部附属植物園が整備された。賢治時代の植物園は，同時に岩手大学教育学部に管理替えとなり，新たに教育学部附属自然観察園と名称が替わった。記述の理解を助けるため，当時（賢治時代）と現在の植物園，自然観察園，林木園などの施設配置図を須田ほか（1998）から図1と図2に転載した。

賢治と植物園との関わりについて，賢治と寄宿舍が同室だった工藤（1978）は，次のような

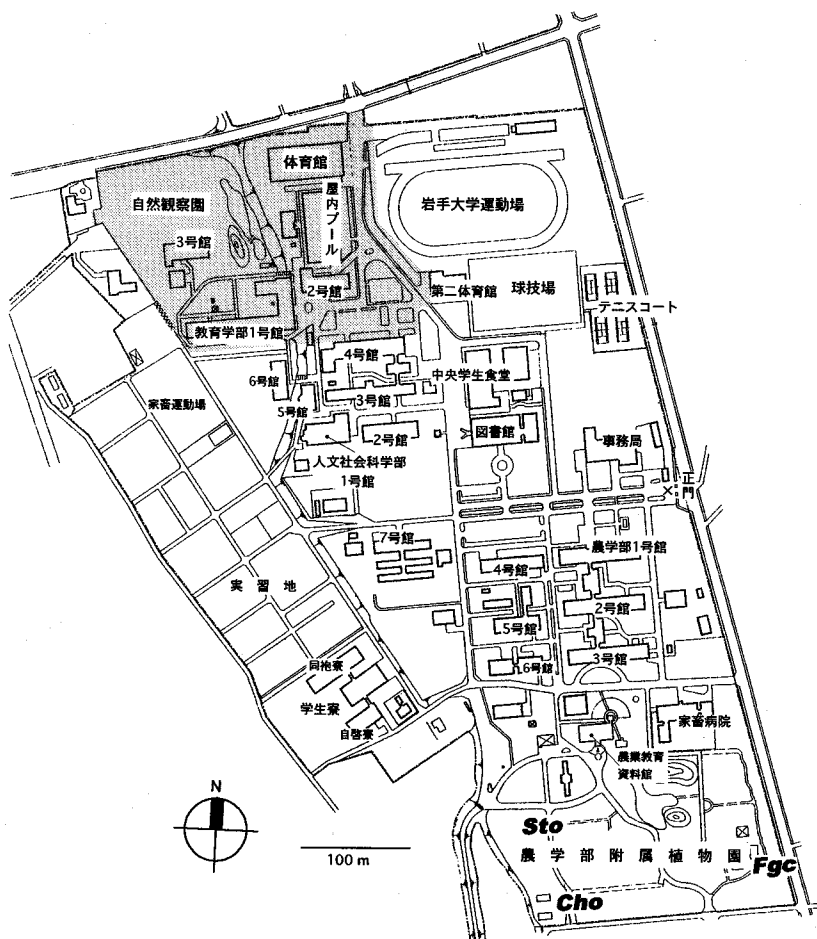


図2 岩手大学構内（工学部を除く、1997年現況）（須田ほか、1998）  
 および宮沢賢治作品に出現した植物  
 Sto：ハクウンボク，Cho：ヒノキ，Fgc：ブナ

ことを書いている。

現在の教育学部の北西にあった植物園は私も学生時代には極めて魅力のある植物園でした。高台の崖下の所には溜池があり、この池の中央には渡り橋がかけられ、池には水蓮が作られ、開花時期には美しい花がながめられました。橋を渡ると中の島に高く積み上げられた小山が造られ、所々に大きな石も積み上げられ庭の風情を一層高めました。この植物園の庭で寄宿舎の同室の室員が宮沢賢治さんを囲んで写真をとりましたが、この写真は今も貴重な資料となっております（種々の著書や印刷物（岩手大学資料収集委員会監修、1978）など）にしばしば載る写真らしい。筆者ら注）。

森（1974）や小原（1983）は、賢治と盛岡高等農林学校の施設との関わりについて、植物園

や植物園の南にあった果樹園，その一隅にあった農事小屋についても記している。それらによると賢治は，植物学的知識の蓄積と同時に，構内に造られた植物園，果樹園，見本園など実験・実習のための諸施設にも関心を示したらしい。

また，盛岡高等農林学校を辞した後，花巻農学校教師時代の賢治に会った森（1988）は，賢治に何度か上田の高等農林学校植物園に連れられていったと述懐している。植物園の園丁さんの詰め所，花畑，桜草の話や，賢治が自ら花壇の縁のサクラソウを掘り取るなどのエピソードを書いている。これらのエピソードは，賢治の植物園への関心のほどを窺わせる。

### 3 盛岡高等農林学校構内の作品例

#### (1) 旧植物園（自然観察園）で詠まれた短歌

賢治が旧植物園（現在の教育学部自然観察園である賢治時代の植物園を以下旧植物園と呼ぶ）で本格的に植物を学んだ時期は，旧植物園が林木園から移設されて，わずか5～6年しか経っていなかった。当然現在のような鬱蒼とした植生景観ではなく，大きな樹木個体はなかったはずである。須田ほか（1998）に登載された旧植物園の写真や，賢治と5人の学友が写っている旧植物園撮影とされる写真（岩手大学農学部資料収集委員会（1978）の134・135頁の写真で，多くの他の著書にも引用される）の樹木は全て低木で，植栽後（旧植物園造成後）間もないことが分かる。造成時の植栽植物リストは不明であり，現在の自然観察園にどのような植物が引き継がれているか全く分からない。ここでは，盛岡高等農林学校の施設と，それに関わって植物を登場させた作品を主として取り上げた。

オキナグサとレンゲツツジ 1917年の5月，盛岡高等農林学校3年生の賢治は「植物園二首」という小見出しを付した次の短歌を詠み，歌稿として残している。

おきなぐさ／ふさふさのびて／青ぞらにうちかぶさりて／ひらめき出でぬ  
な恐れそ／れんげつゝじは赤けれど／ゑんじゅも臨む 青ぞらのふち

オキナグサは現在，自然観察園には生育していないが，農学部附属植物園（以下，現植物園と呼ぶ）のフローラリスト（岩手大学農学部附属植物園，1991）には登載されている。『創立十周年記念帖』（盛岡高等農林学校創立記念祝賀会，1913）にある旧植物園の記述には，「元第一教舎の南東にありしが明治四十四年三月実験農場の北端に移せり，総面積一町八反歩余にして分科園，花壇，岩山及び池等を設置せり，……」とある。この中で分科園はおそらく教育の目的で，分類群による区画をつくり，「科」別に植物を収集し，植栽したものと推定される。オキナグサは，キンポウゲ科（当時はキツネノボタン科に分類されていたと考えられる（牧野，1940））の草本として植栽されていたのであろう。レンゲツツジは自然観察園に生育するが，エンジュはみられない（須田ほか，1998）。

#### (2) 構内で詠まれた短歌

ハクウンボク 次の「はくうんぼく」2首を詠んだ場所は特定できない。ハクウンボクは現在，自然観察園や現植物園ともにみられる。現植物園の個体（図2，Sto）はDBH（胸高直径）3～16cm，樹高8mの10幹からなる萌芽株である。賢治の時代に寄宿舎区画の西側通路にある

この萌芽株は、その時以来萌芽更新を繰り返してきたと考えられ、あるいは賢治が詠んだ個体と同一かも知れない。

静かなる花を湛ふるかゞやきのはくうぼくにむるゝすがら  
あさひふる／はくうぼくの花に来て黒きすがら／しべを噛みあり

ブナ、シロツメクサ　また次の「ブンゼン燈の歌」の3首は、内容からみて、第2教舎棟の西の部分にあった、当時の農芸化学科実験室で詠まれたものである。実験室の近くには実験用のガスタンクがあった。

くれちかき／ブンゼン燈をはなるれば／つめくさのはな／月いろにして  
六月の／ブンゼン燈の弱ほのほ／はなれて見やる／ぶなのひらめき  
濾し了へて／窓にいたれば／つめくさの／はなとまくろきガスのタンクと

賢治が土壌分析を行った実験室から離れたところにブナがあった。現植物園、図2のFgc地点に、DBHが45cm, 42cm, 50cm, 樹高が18~20mほどの比較的大径のブナ、3個体が近接してみられる。ここは当時の第1教舎の東端、当時の学生図書閲覧室の南東方であり、実験室からやや離れた位置にある。当時の林木園に植栽されたブナの若木が第1教舎と第2教舎の空間を通して、実験室から見えたとと思われる。「はなれて見やる／ぶなのひらめき」の描写は、ブナまで距離があったこと、見えたのが梢の先であったことを類推させ、これらのブナが短歌に詠まれた個体と同一かも知れない。

ツメクサ（標準和名はシロツメクサ）は、代表作の童話「ポラーノの広場」ほか多くの作品に登場する植物であり、現在の岩手大学構内では至るところにみられる。

リンゴ、スモモ　これらの果樹については、果樹園や見本園（これらの施設の位置は図1参照）という語の入ったメモが前書きに付された短歌もある。スモモ（植栽地を確認していない）は現在でも現植物園にあるが、リンゴはすでにない。

#### 見本園の夕暮

しめやかに／木の芽ほごるゝたそがれに／独乙冠詞のうた嘆きくる  
果樹園にして手をかなしめる人  
りんごの樹／ポルドウ液の霧ふりて／ちいさき虹のひらめけるかな  
果樹園の白き夕日  
つぶらなる白き夕日よいつまでか／ながうごかずにわれをなやめる  
小すももの／カンデラブルの壁の上に／白き夕陽はうごくともなし

#### (3) 寄宿舍で詠まれた短歌

アオキ（ヒメアオキ）　賢治は、盛岡高等農林学校入学の1915年4月から1917年3月まで寄宿舍（自啓寮）で過ごす。当時の寄宿舍は、現植物園の西半部に建っていた（図1参照）。ここで詠まれたアオキの短歌がある。夏休みで学生の多くは帰省し、賢治のみが寄宿舍に残ったらしい。垣根に用いられることの多い低木のアオキは、現植物園自啓寮跡の碑の北東園路沿い

の垣根にみられる。盛岡市内で垣根に植栽されるアオキ (*Aucuba japonica* Thunb.) は斑入りの園芸品種が多いが、自然観察園や現植物園の林床には、鳥により散布された種子から発芽した個体も多数生育している。これらの中には、アオキの変種で、日本海側の多雪地に生育するヒメアオキ (*Aucuba japonica* var. *borealis* Miyabe et Kudo) もみられる。

夏きたりて／人みな去りし寄宿舎を／めぐる青木に／あめそゝぎつゝ

ヒノキ 1917年1月の日付をもつ「ひのきの歌」と題し、ヒノキを詠み込んだ一連の短歌群がある。第1日昼と付された短歌3首からはじまり、第2日夜の2首、第3日夕の2首、第4日夜の2首、第5日夜の2首、第6日昼1首、第6日夕1首、第7日夜3首、そして第x日と付した1首から構成されている。詠んだ場所を推定させる短歌を列挙する。

なにげなく／窓を見やれば／<sup>ひと</sup>もとのひのきみだれゐて／いとゞ恐ろし  
 風しげく／ひのきたわみてみだるれば／異り見ゆる四角窓かな  
 年わかき／ひのきゆらげば日もうたひ／碧きそらよりふれる綿ゆき  
 しばらくは／試験つゞきとあきらめて／西日にゆらぐひのきを見たり

最後の短歌によると、1月の試験(学年末試験か)シーズンであることが明らかであるが、場所を明示する語句はない。しかし、これら一連の短歌は寄宿舎で詠まれたと推定される。詠まれたヒノキはいまだ若齢の単木である。屋内にいる詠み手が四角な窓を通して見ているヒノキは、西日にゆらいでいるので、建物の西側に植栽されている。賢治1年生時の寄宿舎は南寮の1号室東端の部屋であり、1917年の1月の2年生時には西端に近い9号室であった(板谷, 1989)。冬季1月のいまだ低い太陽高度から推定すると、南寮の南西方に1本の若齢のヒノキがあったことになる。この推定位置に現在ヒノキの大径木(DBH76.5cm, 樹高20m)が1個体ある(図2, Cho)。このヒノキが、ほぼ80年前に賢治の見た、冬の季節風に揺すられ、枝に着いた雪を払った若いヒノキに違いない。

ヒノキの自然分布は福島県が北限であり、盛岡での植栽個体もそれほど多くはなく、いわば異郷の植物として賢治の関心を引いたのであろうか。このヒノキに近接して、盛岡ではともに植栽個体の少ない、自然分布が宮城県以南のカヤや自然分布が福島県以南のツガなどの大径木があり、おそらく当時の個体である。ところが賢治は、それらに関心を示さず、関心は専らヒノキなのである。賢治の童話、詩、短歌などに高い頻度で登場するヒノキは、植物そのものとしてだけでなく、童話「ひのきとひなげし」のように擬人化されて、あるいは、心象の投影として描かれる、キープラントの一つらしい(中地, 1996)。賢治の多数の作品に多様に描写されたヒノキの世界は、現植物園に残されたヒノキから発展して形成されたものといえよう。

#### (4) 小品「[旅人のはなし]から」と旧植物園

この短編は1917年、盛岡高等農林学校アザリア会の謄写印刷の同人雑誌『アザリア』の第1号に掲載されたものである。物語の世界、書物の国というべき世界をさすらう旅人の話である。時を超えて旅する王子の終わりにき漂泊のことが語られたのち、次のような結びで終わる。なにか唐突に旧植物園が出てくるようにも思われるが、賢治にしてみれば旧植物園こそ物語を生

み出す場であったともいえる。

盛岡高等農林学校に来ましたならば、まづ標本室と農場実習とを觀せてから植物園で苺でも御馳走しやうではありませんか。新しい紙を買って来て、この旅人のはなしを又書きたいと思ひます。

また、「植物園」と付した次の短歌は、一連の短歌群に付された題「神田」、「上野」などから、明らかに現東京大学理学部附属植物園で詠まれたものである。

八月も／終われるゆゑに／小石川／青き木の実の降れるさびしさ

おそらく賢治も一市民として1916年夏の上京時に通称「小石川植物園」を訪れたに違いない。当時象牙の塔であった帝国大学は、植物園という窓口を通じて社会に開かれていたことになる。もしこのことを当時の賢治が認識していたなら、客人（市民を含めた訪問者）を接待するに相応しい施設として、賢治は植物園を捉えていたのかも知れない。

#### 4 環境教育教材としての賢治植物—オキナグサ—

桜田（1996）は賢治作品の中に登場する植物の出現頻度（登場する頁数）を求めているが、草本で高頻度に出現する種は、ツメクサ（シロツメクサ）の58頁、ユリ類（種は特定されない場合が多い。筆者ら注）の38頁、スズランの25頁について、4番目にオキナグサの21頁と続いている。オキナグサがこのように頻繁に登場するのは意外ともいえる。オキナグサの登場する作品の主な例をみよう。

賢治は1915年、1916年、1917年の盛岡高等農林学校時代の春、前述の旧植物園の短歌以外に、短歌で次のように詠った。

をちやまに／雲かゞやくを 雲脚の七つ森にはおきな草咲く  
おきな草／丘のなだらの夕陽に／あさましまでむらがりけり  
おきな草／とりて示せど七つ森／雲のこなたに／むずかしき面

詩集『春と修羅』のオキナグサでは、詩「おきなぐさ」と詩「小岩井農場」（一部）に次のような表現をみる。

「おきなぐさ」  
風はそらを吹き／そのなごりは草をふく  
おきなぐさ冠<sup>くわんもウ</sup>毛<sup>しつちき</sup>の質直／松とくるみは宙に立ち  
（どこのくるみの木にも／いまみな<sup>きん</sup>金のあかごがぶらさがる）  
ああ黒のしやつばのかなしさ／おきなぐさのはなをのせれば／幾きれうかぶ光酸の雲  
「小岩井農場」  
くらかけ山の下あたりで／ゆっくり時間もほしいのだ



あすこなら空気もひどく明瞭で／樹でも草でもみんな幻燈だ  
 もちろんおきなぐさも咲いてゐるし／野はらは黒ぶどう酒のコップもならべて  
 わたくしを歓待するだらう

童話「おきなぐさ」は、賢治の童話のなかでも、静謐で清々しい作品である。オキナグサについての語り手の私とアリとの会話、2個体のオキナグサ同士の会話、ヒバリとオキナグサたちの会話、などが静かに語られ、最後にオキナグサの冠毛（冠毛はキク科の種子のもので、オキナグサのものは果実の白毛）が飛び去り、語り手は、天上の2つの小さな変光星になったと思うと結んでいる。

最初にオキナグサの方言である「うずのしゅげ」の説明があり、なんとなく土俗的な話が始まるかのように見え、山男もちょっと顔をだしているが、内容はむしろ欧米風の、いわば無国籍的な物語になっている。

この物語の舞台は小岩井農場とされている（原，1999）。むろん、旧植物園との関係は明確には書かれていない。しかし、オキナグサをアネモネの従兄と書いているのは、オキナグサの2つの学名、*Anemone cernua* と *Pulsatilla cernua*（牧野，1940）のうち、前者を知っていたためである。そして、その学名は盛岡高等農林学校の旧植物園で学んだもの（前述の短歌と分科園の関係）と推定される。

作品に表現されている、「丘」、「七つ森」、「小岩井農場」、「草」、「松（アカマツ）」、「くるみ（オニグルミ）」などのキーワードは、オキナグサの立地（生育地）環境を示している。オキナグサの立地は、疎開した植生、つまり草地であって、森林ではない。

賢治がとくに愛着をもっていた野草の一つであったオキナグサ（伊藤，1998）は、当時の岩手県の丘陵地では、「あさましきまで」に群生するごく普通の植物であったに違いない。賢治の愛着や関心の有無にかかわらず、オキナグサは、いわば「イーハトーヴ植物」の代表種だったのである。

現在、盛岡市や花巻市近郊の丘陵地ではオキナグサがほとんどみられない。かつて普遍的にみられ、明るい草地に生えていたオキナグサは、近年全国各地の自生地が急速に失われ、もはや絶滅が危惧されるいわゆるレッドデータ植物なのである（日本植物分類学会，1993）。その原因は、園芸ブームの乱掘と半自然草地の人工草地化であり、草地の森林化（スギ林への転換やコナラ林への遷移）である。つまり、オキナグサの生育する半自然草地は、火入れや草刈りなど人間の利用や管理によって維持されていた二次植生なのである。いわゆる、1970年代の燃料革命は、コナラ林（薪炭林）、ススキ草地、ハギ山（放牧、採草地）の維持管理の中止によって、これらの植生の遷移を進行させ、あるいは、外来牧草種の導入によって、半自然草地は人工草地に変わった。沼田（1994）は、このような日本の草原景観の消失に警告を発し、保全の必要性を訴えている。賢治作品のオキナグサは、岩手県のみならず日本に存在した草地景観の歴史的記録であるとさえいえる。

## 5 環境教育教材としての賢治植物—植物相と自然景観—

自然や自然環境とはなにかといった研究レベルでの議論はあるが、それとは別に、いわば一般的にイメージされ、捉えられている自然や自然環境もある。それらは、地形要素（山と川な

ど)や生物要素(とくに、緑、森林、樹木、花、紅葉などの言葉で表される植物)によって捉えられている(三浦, 1998)。つまり、風景論的自然景観を含めて、地域の自然景観の骨格は地形と植生によって形づくられている。とすれば、地域の植生は、地域の自然環境教育にとって好適な教材である。

多様な植生は多様な植物で構成されているので、地域の植生の理解は地域の植物の理解に支えられるといえる。そして、植物の理解には植物種名の理解が不可欠である。ところが、どれだけ植物種を特定できるかといったことは、多くの場合植物分類学などの専門の領域だと受けとめられている。農芸化学、とくに土壌学を専攻した賢治の作品に多くの植物が登場し、そのことが賢治の自然への関心を計る尺度だといわれる(伊藤, 1998; 桜田, 1996, 1997)。そこで、賢治の植物的自然の実態を知るために、短歌、詩、童話を中心に登場植物のリストを作成し、そこから捉えられた賢治における「みどり」の環境(イコール植物的自然環境)の分析を試みた。

桜田(1996)は賢治作品に登場した植物がおおよそ400種だと述べているが、個々の作品における表現を検討すると、植物種の特定が難しいことも多い。例えば、学名や学名に由来した造語の扱いである。ベチュラ(*Betula*)は岩手県の山地や丘陵地に普通にみられるシラカンバと推定されるが、ここにダケカンバ、ウダイカンバなどをあてることも可能である。また、作品に出現する回数(以下、出現頻度とする)の多いキキョウは、ほとんどが「ききょう色」と色彩を表し、植物そのものを表現していない。ここでは、「MEMO FLORA ノート」などにみられる園芸草本(多くは英名や学名で記されている)、学名の中で種を特定できないもの、褐藻類やコケ類など広範囲な植物の総称などを削除し、植物そのものが推定可能なもののみをリストアップした。賢治の膨大な作品に植物が登場することによるカウント漏れや、個々の表現における植物種の特定の難しさのため、筆者らがリストアップした337種は確定した数ではない。しかも、作物の品種、総称(例えば、バラ類、キク類、ユリ類、ラン類、ヤナギ類)、キノコ類(担子菌類)などをも残したので、337種が同一の分類基準で特定されたものでもない。こ

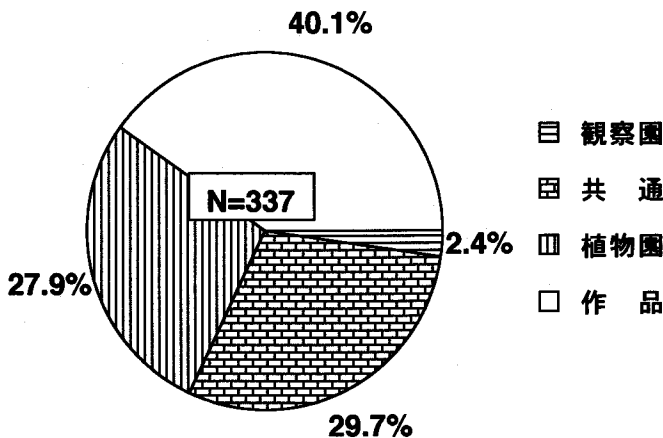


図3 宮沢賢治作品の植物

観察園：教育学部自然観察園にのみ生育する植物、植物園：農学部植物園にのみ生育する植物、共通：観察園と植物園ともに生育する植物、作品：作品のみに登場する植物

の種の吟味は別報で扱うことにして、作品に登場した植物リスト（いわば賢治フローラリスト）から、賢治の植物的自然や自然環境を考察することを試みる。そのためにまず、賢治の「植物の世界」の原点の一つでもある岩手大学の植物園のフローラリストと賢治フローラリストとを照合してみよう。

自然観察園のフローラや主要な木本種の分布は須田ほか（1997；1998）によって、現植物園のフローラは岩手大学農学部附属植物園（1991）によって調査され、フローラリストが公表されている。これらのフローラリストとここで作成した賢治フローラリストを比較した（図3）。ただし、現植物園の調査は1990年に行われているので、リストにあるすべての種が現在も生育しているかは疑問である。この10年間に、高木の生長にともなう林床の被陰による草本種の消滅や、管理作業による意図的もしくは不用意な個体の除去などが考えられる。新たに加わったものを含めて、現況の確認は行っていない。337種の賢治フローラの中で、ほぼ60%の植物が2つの植物園（自然観察園も実態や設置の目的からみて植物園である）に生育し、40%が作品のみに登場する植物である。図3では、賢治フローラの中で、自然観察園に生育する種、現植物園に生育する種、両園に共通して生育する種などにも区分した。

賢治フローラを立地ごとに区分したのが図4である。この図では2つの植物園に生育する種と作品のみに登場する種とに区分した。作品のみに登場する種の割合が作物や園芸種で相対的に高いことがわかる。したがって、耕地や庭園（花畑、花壇も含む）の植物を除けば、賢治フローラのほとんどが2つの植物園で観察することができるのである。岩手大学の学生や教官にとって、賢治の文学作品やその背景であった当時の自然環境は、ごく身近に生きている植物を通じて学習可能なのである。

観点を変えれば、賢治フローラのほぼ半数の植物は、公園、庭園、果樹園、耕地などきわめて人為的な立地に生育しているものであり、賢治がいかに都市や農村における生活そのものの中の自然（生き物という意味での自然）に興味と関心を抱いていたかを、図4は示している。野生植物に分類した賢治フローラの中身の詳細な吟味は別報とするが、出現頻度の高い植物を列挙しよう。賢治の全作品における植物の出現頻度について、桜田（1998）は掲載頁数で頻度

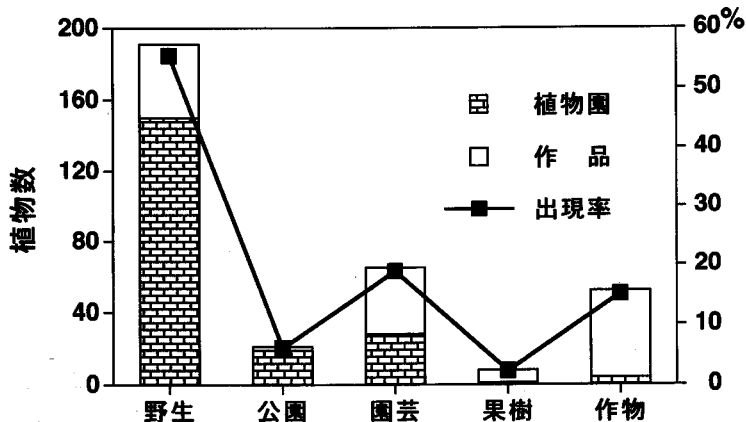


図4 生育地別にみた宮沢賢治作品の植物  
植物園：自然観察園と植物園に生育する植物，作品：作品のみに登場する植物，出現率：生育地別の出現率（総種数=337）

を出したが、ここでは、ジャンル別を考慮せず登載作品（短歌、詩、童話のみで、それぞれの異稿は対象としていない）数で頻度評価を試みた。両者を比較したが、高い頻度の植物群はほぼ同様であり、それらを賢治フローラの中心的植物と考えることができよう。

木本植物では、マツ類（標準和名クロマツの名称は作品にあるが標準和名アカマツはなく、すべてマツである）、カシワ、カバあるいはシラカバ（標準和名シラカンバ）、カラマツ、クリ、クルミ類（サワグルミはあるがオニグルミはなく、すべてクルミである）スギ、ナラ類（標準和名のミズナラやコナラと表現されることは極めて稀）、ハンノキ、ヒノキ、ヤナギ類（ネコヤナギ、カワヤナギなどのほか標準和名表記は少ない）などである。草本植物は、ススキ、シロツメクサ、ノバラ（表現された環境から、多くがノイバラに特定される）などである。これらの植物はほとんどが二次植生の主要構成種で、現在でも身近な環境に豊富に生育している。ただし、かつて（イコール賢治の時代の岩手県において）維持のため、火入れや刈り取り管理された草地に多く生育したカシワやススキは、オキナグサと同様管理中止によって個体数が減じたようである。ハンノキも個体数を減じたが、おそらく耕地整理や用水路の整備による立地の消滅が要因に違いない。このような、二次植生の変化とその要因、つまり自然環境の変化も賢治フローラから読みとることができる。

## 6 おわりに—大学施設の活用に向けて—

本報告の目的は、前述したように理科の、それも生物学専攻の学生のみを対象にした学習試案を提示することではない。理科以外の分野を専攻する多くの学生が、自然や自然環境を学習するきっかけ、方法、フィールドを提示することにある。学習のフィールドとして自然観察園と現植物園が、岩手大学キャンパス内に準備されていることをまず指摘したい。

総合的学習の一つの柱として環境教育があり、環境教育の一つのねらいに生態学的な自然の教育があると考えられる。ところが「自然」の教育を掲げた途端、それは理科や自然科学の領域だとして、積極的なアプローチを放棄する教師や研究者の多いことも事実である。学際領域や境界領域研究の重要性の指摘にかかわらず、あらゆる場面において文科系と理科系の区別がまだになされる。中学校や高等学校課程の理科を専攻する学生数が相対的に少ない教員養成系大学の実質は、文科系大学といってよく、自然環境の实地教育や現物教育をさらに難しくしている。賢治の文学作品と、植物という自然や植物園という自然が凝縮された場の関わりを取り上げた背景には、このような教員養成系大学の実態を意識したことがある。理科や生物学を専攻しない学生であっても、日常生活の中で多くの植物と接した結果、植物への関心や興味をもつ学生は多い。植物そのものやその名称の知識の蓄積には著しい個人差があるが、多くの学生は少なくとも20種や30種の植物名（標準和名かどうかは別）を列挙できるのである（三浦、1998）。岩手県を主舞台とした賢治の文学作品と、その中の植物を教材として、総合的学習を指導する教員養成を目指した地域の環境教育を提起したい。そして、大学における環境教育の場として、大学植物園やその類似施設の今日的役割を強調したい。植物園をもたない大学でもこのような環境教育の実施は容易である。

緑地保全の一環としての「市民の森（森林公園）」が都市近郊に設置されているが、近年こういった森林公園は大都市圏に限らず、多くの市町村に開設されている。それらの設置の目的には、従来からの水源涵養林、防災林、風致林などの機能に加えて、ふれあいの場、住民参加、

自然観察などの機能を謳ったものがみられる。自然環境の保全を啓蒙する場であるこれらの森林公園は、活用の仕方によって生活体験学習や自然体験学習の格好のフィールドである。しかし、その利用率は決して高くない(三浦, 1993)。ハードは整っているのである。もはやソフトの案出とその実践の時期であろう。

そして、社会に開かれた大学として、これらの施設を市民に開放し(現在岩手大学では植物園のみ開放されているが、自然観察園は公的には開放されていない)、生涯学習の場としても活用すべきであろう。

本報告の内容の理解を容易にするため、岩手大学教育学部須田裕教授ほか(1998)作成の地図をほぼそのまま掲載した。この報告が同氏らの論文の副題にある「教材化のための基礎資料」という意図に応えた試みであることを記し、転載許可への謝辞としたい。

#### 引用文献

- 原 子朗(1999):小岩井農場。『新宮澤賢治語彙辞典』, 246-247, 東京書籍
- 伊藤光弥(1998):『宮沢賢治と植物—植物学で読む賢治の詩と童話—』。216pp, 砂書房, 東京
- 板谷英紀(1979):『賢治博物誌』。286 pp, れんが書房, 東京
- 板谷英紀(1989):『賢治と岩手を歩く』。185pp, 岩手日報社, 盛岡
- 岩手大学農学部附属植物園(1991):『岩手大学農学部附属植物園植物目録』。64pp, 岩手大学農学部附属植物園, 盛岡
- 上谷順三郎・中地雅之(1998):教員養成学部における国語科と音楽科の合同演習の試み—合科的アプローチによる「やまなし」(宮澤賢治)の理解と表現—。「岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要」, 8, 47-63.
- 工藤藤一(1978):イーハトーヴォの思い出。『盛岡高等農林学校写真帳 熱きポランのひろば』, 34-37, 岩手大学農学部資料収集委員会, 盛岡
- 牧野富太郎(1940):『牧野日本植物図鑑』。1080pp, 北隆館
- 松田司郎・笹川弘三(1991):『宮澤賢治 花の図誌』。238pp, 平凡社
- 三浦 修(1993):森林公園の需要と環境の時代。「季刊地理学」, 45, 42-44.
- 三浦 修(1998):地理学教育における二次植生の意義。「岩手大学文化論叢」, 第4輯, 9-17.
- 宮城一男・高村毅一(1980):『宮沢賢治と植物の世界』。193pp, 築地書館
- 盛岡高等農林学校創立記念祝賀会(1913):『創立十周年記念帖』。22pp, 盛岡高等農林学校, 盛岡
- 森 荘巳池(1974):『宮沢賢治の肖像』。461pp, 津軽書房, 弘前
- 森 荘巳池(1988):『ふれあいの人々 宮沢賢治』。218pp, 熊谷出版印刷, 盛岡
- 中地 文(1996):ひのき。天沢退二郎編『宮沢賢治ハンドブック』, 160-161, 新書館, 東京
- 日本植物分類学会(1993):『レッドデータブック—日本の絶滅危惧種—』。141pp, 農村文化社
- 日本植物園協会監修(1990):『最新全国植物園ガイド』。215pp, 日本テレビ放送網KK
- 沼田 真(1994):『自然保護という思想』。212pp, 岩波新書
- 小原 忠(1983):チュウリップの幻術。「賢治研究」, 3, 1-7.

- 桜田恒夫 (1996) : 『賢治のイーハトーブ植物園』. 214pp, 岩手日報社, 盛岡
- 桜田恒夫 (1997) : 『続賢治のイーハトーブ植物園』. 217pp, 岩手日報社, 盛岡
- 設楽 寛編 (1988) : 『わが国における野外研修施設の実態—議論の呼び水として—』. 61pp, 日本  
学術会議地理学研究連絡委員会
- 須田 裕・武田豊蔵・菊池京子 (1997) : 『教育学部周辺および自然観察園の樹木配置図』. 岩手大  
学教育学部生物学教室植物形態・分類学研究室, 5pp, 盛岡
- 須田 裕・伊藤奈美子・菊池京子 (1998) : 岩手大学教育学部周辺および自然観察園の植物 I.  
「岩手大学教育学部研究年報」, 58 (2), 17-39.
- 須田 裕・伊藤奈美子・菊池京子 (1999) : 岩手大学教育学部周辺および自然観察園の植物 II.  
「岩手大学教育学部研究年報」, 59 (1), 149-161.

(なお、本文中に引用した宮沢賢治の作品は、文庫版『宮沢賢治全集』(筑摩書房, 第11刷, 1996)によった)